月刊　教育情報誌

明日への学び

第　１６　号

２０１４年　７月２５日　発行
発　行：福井県教育委員会
福井県学力向上センター
ＴＥＬ：0776-20-0295
メール：gakukyousei@pref.fukui.lg.jp

地方からの発信①「福井のよさを伝え 大切にする教育」

県内の企業経営者の方に話をうかがうと、決まって話題に上るのが「Ｕターン問題」です。「福井の優秀な子どもたちがなかなか福井に戻ってきてくれない」といった「不満」、「福井に戻って福井を支えてくれる人材をもっと育成してほしい」といった「期待」の声を多く聞くのです。

高校卒業後、約３割が県外に流出します。県外の大学等を卒業して１割強が地元に戻って就職しますが、トータル２割弱の人口流出があると言われています※1。この人口減少の問題はどの地方でも見られることで、「全国の約半分の市町村で、２０４０年の２０歳から３９歳の女性の人口が５割以上減少する※2」という「日本創成会議」の推計データが最近発表され、社会に大きな衝撃を与えました。福井も例外ではなく、これが現実になれば人口が保てず、市町村消滅の恐れもあります。今後、地方の人口減少に対する危機感はますます高まってくると予想されます。

人口減少の原因はいろいろな要素がからみ合っており、県でもさまざまな政策を講じて歯止めをかけようとしていますが、大きな変化をもたらすには至っていません。そのもどかしさもあって、経営者の方々が「学校教育」に「期待」をかけようとするのは、当然のことかと思います。

では、学校教育においてすべきことは何でしょうか。私たち教員は、「福井に残り活躍する人材を育成するため」だけに子どもたちを育てているわけではありません。世界的に活躍する人材も、全日本的に活躍する人材も、そして地元福井で活躍する人材も育成するのが私たち教員の役割です。「地元の大学等に進学する」という希望も、「県外に出て新しい世界を見たい」という希望も公平に支援しつつ、福井の魅力をしっかり伝えることで、「福井に戻る」という選択肢を子どもたちに与えていくことが重要になってきます。

今号では、ふるさと福井のよさを伝え、大切にする教育の必要性や意義について考えていきます。いわゆる「ふるさと教育」です。「ふるさと教育」は奥行きもあり、さまざまな視点が考えられますが、今号では、「グローバル人材育成の原点であるという観点」、「福井の先人の歩んできた道々から学ぶ観点」、「福井を知り、自分の将来を考えるという観点（希望学の観点）」の三つの切り口で迫りました。学校教育の果たすべき役割は何なのか、考える機会としてください。

※1：http://www.pref.fukui.jp/doc/toukei-jouhou/spot/spot22_d/fil/005.pdf
※2 日本経済新聞の記事：http://www.nikkei.com/article/DGXNASFS0802O_Y4A500C1EE8000/

＜目　次＞

○異文化理解の出発点～出川昌人氏～	Ｐ　２	○連載「派遣教員インタビュー」③（佐賀県）	Ｐ１１
○福井の先人から学ぶ意義～笠松雅弘氏～	Ｐ　４	○連載「派遣教員インタビュー」④（長崎県）	Ｐ１２
○「今、自分が何をすべきか」～玄田有史氏～	Ｐ　６	○報告「中高授業改善事例に関わる公開授業④」	Ｐ１３
○自信と誇りを持って生きていくために	Ｐ　８	○おしらせ	Ｐ１４
○報告「福井ふるさと教員」による授業	Ｐ１０		

全教員向け

自分や福井を理解することは異文化理解の出発点になる

～出川 昌人 氏 インタビュー～

出川氏は旧武生市出身。武生高校を中退してイギリスに留学、オックスフォード大学および大学院を経てアメリカ・ワシントンＤＣの国際的に有名なシンクタンク、ブルッキングス研究所に入所されました。その後、外資系金融機関で手腕を発揮し、現在は経営者として活躍されています。その傍ら、高校生の留学のための組織ＵＷＣ(United World Colleges)日本協会の役員も務め、高校生の留学を支援されています。そんな出川氏に、グローバル人材育成の観点から、「ふるさと教育」の必要性についてお話をうかがいました。

出川 昌人（でがわ・まさと）

ブラックロック・ジャパン代表取締役社長。
1957年旧武生市生まれ。1973 年武生高校入学。
1974 年イギリスのアトランティックカレッジに留学。
1976 年オックスフォード大学に入学し、1979 年に同大学院を卒業。
1982 年国際的に有名なシンクタンクであるブルッキングス研究所に入所。
1985 年以降、外資系金融機関のモルガンスタンレー、JPモルガンを経て
2007 年にフランスを代表する金融機関であるソシエテジェネラルアセットマネジメント(現アムディ・ジャパン)の社長に就任。2010 年 11 月から現職。
※ ブラックロック … 世界中の顧客から預かっている資産が 400 兆円を超える世界最大級の資産運用会社

○福井の子どもたちは福井に対するプライドが薄い

歴史を振り返ると、結果的には敗者となったものの、朝倉や柴田は戦国時代の越前を背負い、浅井・豊臣・織田にとって大きな存在でした。幕末においては松平春嶽が、坂本龍馬の活躍にも一役買った人物として、歴史の表舞台に登場しています。武生は越前の国府であった時代もあり、敦賀は大陸への玄関口でした。しかし、子どもたちはこのような福井の歴史をどのくらい知っているでしょうか。ふるさとについて学ぶ機会がそう多くなく、福井が歴史的に担ってきた役割をよく知らないためかどうかは定かではありませんが、一般的に福井の子どもたちは、ふるさと福井に対するプライドが薄いように感じます。

福井の人は、情報発信や自己表現が苦手と言われていますが、「自分の中に誇りを持てるものがない」ことがその一因としてあるのではないでしょうか。

○歴史の舞台で福井が担ってきた役割を知る

日本の子どもたちは、日本全国で標準化された日本史を学んでいます。日本の高校教育は、受験勉強で試験の点数を上げることにウエイトをかけ過ぎていて、ふるさとの歴史の勉強を無駄だと思

っている節があります。福井の子どもたちは、歴史の舞台のその場その場で、福井がどういう役割を担ってきたかをもっと学ぶ必要があるでしょう。福井という舞台で、過去にどのようなことが起こってきたかを知ることは、福井に対する誇りや愛着を持つことにもつながります。

○英語教育と留学生活

ふるさと教育と直接はつながらないかもしれませんが、英語教育の話を一つします。私たちの高校時代は『試験に出る英単語』という単語暗記本が多く使われていました。過去に試験で出題された英文の題材を分析し、頻出単語をまとめた本でした。しかし、これらの単語の中には、日常のビジネスや生活の場面では、ほとんど使わないものがあります。つまり、受験のために「使わない」単語をたくさん覚えて、試験の点数にならない「使う」英語を学習しない傾向があったように感じます。近年、さまざまな場面でこのような指摘があり、現在の英語教育はかなり改善されたようですが、英語が話せることと受験の英語力とが一致しないことは、大きな問題だと思います。英語が使えるようになるには、やはり、留学して英語を話す環境に身を置くことが一番の近道でしょう。

話を戻しますが、私が留学中に福井のことを説明しようとしても、「農業県」であることくらいしか思いつきませんでした。福井の成り立ちや特徴をしっかり学ぶことは、福井県人としてのフレーバーがつく（味わいが増す）ことになります。留学生活の場では、違った国の者同士がぶつかり合います。ユニーク（個性的）な者ほど、周囲に強い印象を与えます。自分の育った場所や環境の話ができるほうが、ローカルフレーバー（地方色）があって、存在感が増すでしょう。

＜出川氏と高校教員の懇談会＞

４月２３日に、高志高校において、出川氏と高校教員との懇談会を実施しました。福井・奥越・坂井ブロックの高校に呼びかけ、１４名の教員が参加しました。出川氏は前日、「考福塾」（福井新聞社・福井銀行主催で、次世代のリーダー育成を目的に年間６回シリーズで開催される催し）の講師として来福されました。懇談会で、出川氏からは、世界の現状から考える日本のリスク（課題）についてお話があり、「①リターンを得るためにはリスクを取ることが大切で、そのためにはチャレンジ精神が必要であること」「②個性を伸ばす（少なくともつぶさない）教育を大切にしてほしいこと」「③高校生には、どんどん海外に出て（外国語の習得は海外に行くことが近道）、外の世界を知るべきであること」などの提言をいただきました。参加者からは、チャレンジ精神やリーダー性は育てられるのか、などの質問が出され、有意義な懇談となりました。あっという間の１時間でした。

○ふるさと教育は異文化理解のベンチマーク（基準点）

「ベンチマーク」は会社経営でよく使う言葉です。業績を評価する上で判断基準となるものです。異文化や外国人を理解する上でも同様ではないでしょうか。もちろん、このようなベンチマークは世界統一のものではなく、自分の中でつくられるものだと思いますが、ある時は日本人的感覚で評価したり、またある時はアメリカ的に評価したりというあいまいなものでは、ベンチマークになりません。「自分から見てどうか」というしっかりした基準がないと、ぶれてしまうのです。日本という「自国」や福井という「ふるさと」の理解が、異文化や外国人を理解するうえでのベンチマークということになるのです。

○福井人としての誇りをもつ

日本人は勤勉で礼儀正しく、日本は製造業に強く安全な国であるという見方があります。これは、言わば日本のベンチマークでしょう。それでは福井と言えばどうでしょうか。三世代同居率や共働き率が高い、水や魚がおいしい、県民の幸福度が高い、などが挙げられるでしょうか。現代はグローバル化・多様化の時代です。福井が歴史的に担ってきた役割を含め、さまざまな福井の特性を子どもたちがしっかり理解して正しく発信し、福井人としての誇りを持って社会に出ていってくれたらと思います。

（平成２６年５月２２日　ご本人にインタビュー）

全教員向け

福井の先人から学ぶ意義

こども歴史文化館館長　笠松 雅弘 氏 インタビュー

歴史を学ぶことについては、「先人のたどった道を学ぶことによって、犯した過ちを繰り返さないためである」という考え方をはじめ、多くの学者が、さまざまな意義を提唱しています。その中でも、ふるさと福井の歴史や先人について学ぶ意義はどこにあるのでしょうか。

この点について、福井県立こども歴史文化館の笠松雅弘館長にお話をうかがいました。開館から５年目を迎えたこども歴史文化館は、昨年度、入館者数が５万人を突破しました。開館日数が年間３００日程度であることを考えると、１日平均１７０人以上の入館者数をはじき出している計算になります。まさに、驚異的な数字と言えるでしょう。

笠松 雅弘（かさまつ・まさひろ）

福井県立こども歴史文化館館長。
1956 年勝山市生まれ。
1980 年筑波大学人文学類卒業後、勝山高校で 2 年間教員を務める。
1982 年『福井県史』の編さん事業に携わる。
1988 年福井県立博物館に学芸員として赴任。
2009 年 4 月福井県教育庁生涯学習課子ども歴史文化館開館準備グループ参事。
2009 年 11 月から現職。
共著に「福井県の百年（県民 100 年史）」ほか。

○先人の存在を子どもたちの記憶に残す

小学校低学年くらいの子どもが橋本左内の功績を知ったとしても、年月がたてば、「福井には昔、橋本左内という人がいた」くらいのことしか覚えていないものです。また、苦労してつまずいた経験を大人は数多く持っていますが、子どもたちはあまり持っていないため、人間としての生き方の魅力が伝わりにくいということも言えるでしょう。つまり、先人の魅力や功績をいくら伝えても、子どもたちに興味・関心を持って受け入れてもらうことは容易ではありません。

ところが、子どものころの記憶は不思議なものです。先人に関するエピソードが、子どもの興味を引くような強い印象を残すものであったら、意外に長く記憶にとどまることがあります。たとえば、少しでも「橋本左内」についての記憶が残っていると、発達段階に応じて知識量が増え、理解できる内容もレベルアップすることにより、「橋本左内」に関する理解が次第に深まっていくものです。「橋本左内」という先人を知らなければ、「橋本左内」から学ぶこと自体がありえませんので、先人について少しでも印象的に記憶することが大切になってきます。

極論かもしれませんが、子どもたちにとっては、福井にこのような先人がいたことを知っているだけでも、意義のあることだと思います。後述しますが、こども歴史文化館では、いかに子どもたちの興味・関心を引きつけるかが誘客のポイントとなっています。

○福井の歴史や先人から学ぶ意義

先人が何を考え、どのような道を歩んできたかを学ぶことは、人生観の醸成や、判断力の育成に大きな影響を与えます。ただし、子どもの発達段階や性格によって、影響の大きさは変わってきます。高校での歴史は「日本史」や「世界史」といった科目での学習になり、自分とは関係のない「単なる過去のこと」として、距離感が生まれてきてしまいます。さらに「受験のため」という感覚も見え隠れするようになります。

ところが、小中学生が地元･福井ゆかりの先人について学ぶことはどうでしょう。同じような環境で育った人物が活躍していれば、自ずと親近感がわきます。また、身近な人物の活躍は自信や誇りになります。その人物が現代に近ければ、その気持ちはより一層強くなるでしょう。（「これき」でも「先人のひろば」だけではなく、現在活躍している方の展示を行っている「達人のひろば」があります。）これらのことが、郷土を愛する心を育むことにつながっていきます。

福井県立こども歴史文化館（これき）とは

平成２１年１１月に開館以来、平成２５年度末までの入館者数は１６万４千人を超えています。

「子どもに郷土の先人または達人を通じて歴史および文化を学ぶ場を提供し、子どもの郷土を愛する心を育むこと」を目的として開設されました。

２階のメインは「先人のひろば」で、歴史上で活躍した福井ゆかりの人物について、古代、中世、近世、幕末、近現代の時代ごとに分けて展示されています。３階には、現在における最先端の産業や伝統工芸、スポーツ・芸能などの各界で活躍する人を紹介する「達人のひろば」や、南部陽一郎博士の展示「科学ワールド」、白川静先生の展示「漢字ワールド」などがあります。

「これき」で展示されている福井ゆかりの人物は、先人・達人等の総計で９７人にのぼります。「学研」の特集で、「これき」は「賢い子を育てる全国１６館」に選ばれています。

○子どもたちへどう伝えるか

「これき」では、展示のゲーミフィケーション（日常生活のさまざまな要素をゲームのかたちにする）を導入しています。子どもたちに興味･関心を持ってもらうための仕掛けです。残念ながら、子どもたちが自発的に「橋本左内の展示を見たい」と思うことはほとんどありません。これきは学校教育の延長ではありませんから、「足を運んでもらう」ための工夫を常に意識しているのです。そういった感覚は、おそらく教育現場とは違うものでしょう。ただ、逆に教育現場では、「誘客」の苦労はほとんどありませんが、「ふるさと教育」の実践においては、子どもたちの印象に残るような工夫が必要になってくるのではないでしょうか。

○実は先生方の研鑽でもある

子どもたちに福井の先人について伝える場合に大切なことは、先生たちご自身が先人のことを知ることです。先人についてさまざまなことを知り、心が動くからこそ、子どもたちに生き生きと伝えられるのだと思います。先人について知ることは、先生ご自身の研鑽にもつながります。先生は大人ですから、自分の人生と重ね合わせて先人を評価することができます。

たとえば、ＮＨＫで放映されていた「週刊こどもニュース」は、子ども目線でわかりやすく解説されています。先人に対する評価を、子ども目線で、先生方の言葉で、子どもたちに伝えていただけると、子どもたちは、より印象深く記憶にとどめることができるのではないでしょうか。

福井の先生方は、福井の先人についてどのくらいご存知でしょうか。これきの「先人のひろば」には、６０人あまりの福井の先人が展示されています。ご覧になられていない方は、ぜひ足を運んでください。また１階では、「これき人物シリーズ（全５巻）」も販売しています。

（平成２６年６月３日　ご本人にインタビュー）

全教員向け

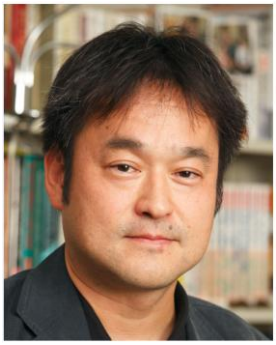
「今、自分が何をすべきか」

～「ふるさと」を学ぶことによりヒントが得られる～

玄田 有史 氏インタビュー

２００８年から６年間、「希望学・福井調査」を目的に福井を訪問されてきた玄田有史氏は、調査だけでなく講演などの活動も福井で行ってこられました。講演等では軽妙な語り口で聴衆の心をつかむ玄田氏から、「ふるさと」を学ぶことの意義を、希望学の観点から話をしていただきました。

玄田 有史（げんだ・ゆうじ）



東京大学社会科学研究所教授。島根県出身。経済学博士。専攻は労働経済学。
東京大学経済学部卒。東京大学大学院研究科博士課程満期退学。
学習院大学経済学部教授などを経て現職。
著書に「仕事のなかの曖昧な不安」、「希望のつくり方」、「14歳からの仕事道」など。
編著に「希望学」(1)～(4)、「希望学あしたの向こうに～希望の福井、福井の希望」など。

○「釜石の奇跡」－ふるさと教育の成果－

釜石は明治や昭和の時代にも津波の大きな被害を受けながら、日本の近代製鉄の先端として町を作り直してきた歴史があります。釜石の子どもたちは、このような地域の歴史について、自分たちで調べたことを持ち寄り、学校祭の舞台で演じたり、詩を書いたりしながら、五感（体）全体を使って学んできました。このことは、東日本大震災の緊迫した状況下でも、体が自然に反応して命を守る行動をとることにつながり、学校にいた子どもたちの犠牲者が「ゼロ」という結果をもたらしました。まさに「釜石の奇跡」と呼ばれている通りです。

「釜石の奇跡」は、過去の歴史の教訓をもとに、シンプルに掲げた防災教育（①想定にとらわれすぎない、②最善を尽くす、③率先して行動）を徹底した成果でもありました。将来の希望を見つけるヒントは、歴史のどこかに必ず存在します。子どもたちにとっても、ふるさとについて学ぶことは、自分が生活している土地だからイメージがわきやすいでしょう。

○地域の偉人は、ひとりでは偉人になれない

釜石は「近代製鉄発祥の地」として有名です。その功労者として、西洋式商用高炉の建造に尽力した南部藩の大島高任（おおしまたかとう）が挙げられます。しかし大島が成し遂げた偉業は、決して一人の力でできたものではありませんでした。大島というヒーローはいましたが、その大島を支えた人たちがいたからこそ成し遂げられたものでした。子どもたちは舞台化する際に、そのことをよく調べ、周囲の協力や理解があったからこそ偉人となれたことを表現していました。

これは福井の偉人についても同様で、支えた周囲の人たちの功績も見逃せません。周囲の人も包括して「偉人」なのではないでしょうか。ふるさとの偉人は個人ではなく、人と人とのかかわりの中で生まれてきています。

○ふるさとを調べることから見えてくる自分の役割

子どもたちが先人の功績を調べると、「すごい」と感じると同時に、「でも、そんな人にはなれない」という感想を持つ場合が多くあります。しかし、前述したように、周囲で支えた人たちに焦点

を当てることによって、自分のやるべきことが何かイメージがわいてくることがあります。

物事を成すためには、三つの「想い」を持つ人のかかわりがカギになります。「①想いつく人」、「②想いこむ人」、「③想いを遂げる人」です。いわゆる偉人として名を残すのは、「③想いを遂げる人」の場合が多いでしょうし、もちろん三つすべてを一人で完結する場合もあるでしょうが、ふるさとを学ぶ上で見逃してはいけないのは、③に至る前の①や②の人たちについて調べることです。①や②の人を調べることにより、自分の役割がどこにあるかイメージしやすくなり、今自分が何をすべきかのヒントが見えてくるのです。

○自分が生きる上でのヒントも見えてくる

子どもたちはさまざまな悩みや不安を抱えています。そして、悩みや不満をもっていろいろと考えている子どものほうが、将来について「怖い」という想いを抱いています。逃げ出すのか、立ち止まって向かい合うのか、思い悩んでいます。こんな子どもたちに対して、大人はただ「がんばれ」というだけでは無責任です。何らかの具体的なヒントが与えられないか。ふるさと教育にはこの点で期待がもたれています。

偉業の背景には、挫折や試練があります。それを何らかの形で乗り越えています。でも実は乗り越えられなかった人も多いのです。乗り越えられなかった人がいるから、次の人が乗り越えられたのかもしれません。こういうことについて、自分たちで調べる活動を多く取り入れられるとよいでしょう。自然に自分たちが生きていく上でのヒントが見えてくるはずです。学校行事のスケジュール等もあるでしょうが、講師を学校で人選し、全校生徒の前で話していただき、生徒は感想を書いて終わるというパターンだけではあまり効果的とは思えません。子どもたちができる限り学校を出て、主体的に調べる活動を大切にしていただきたいと思います。

○「大人版夢カルテ」の作成

福井の誰もが知っている偉人について調べることも大切ですが、実はそれぞれの町の一市井の人でも、がんばっている人たちがいます。そういった人物やそれにまつわるドラマを見つけることも、おもしろいテーマになると思います。方法はまず自分たちで考えさせます。保護者に聞く、地域の資料館（公民館）へ行く、自分たちで探してみる。…子どもたちのアイディアを大切にしつつ、ヒントを大人が出してあげるのもいいでしょう。昭和の戦時中の激動期の話を生で聞くのは、ラストステージになってきました。５人ずつくらいで、同じ人に３回くらい話を聞きに行くといいですね。「現代版のじかに話が聞けるふるさと教育」を是非やるべきだと思います。

○福井をしっかり選んでもらうために

福井はもともと外に向かおうとしていた地域です。がんばってきた人の多くは、敦賀の大和田荘七（俳優：大和田伸也・獏の祖父）のように、港から外へ出て、戻ってきての繰り返しでした。外に向かってチャレンジしようとしていたことは、子どもたちへの大切なメッセージになります。

「仕事がないから外に出ていく」「親が帰って来いと言うから福井に帰ってきた」というように、実は福井へ帰るかどうかの選択は、必ずしもしっかりとは行われていません。中高生の段階で福井についていろいろなことを知り、自分の意志で福井のことを選択できることが理想です。「自分で決めたのだから」と潔く選べることが大切で、そのヒントとして「ふるさとの姿」が大きいのではないでしょうか。「有効求人倍率が高い」などの数字で表せる魅力も福井にはあります。数字で表せるもの、歴史の中にあるドラマのようなものなど、多面的に提供できるといいでしょう。福井をしっかり選んでもらう決断の手がかりになります。

○進学校のふるさと教育

東京大学の学生にふるさとのことを聞いても、何も答えられないことがあります。東京大学に入学する学力を持っていても、アイデンティティが語れないのは人間としてさみしいことです。進学校のカリキュラムは過密で、なかなか余裕がないかもしれませんが、本人の将来のためにもふるさと教育をやるべきだと思います。文学でも政治でも、高校生に合ったレベルで十分です。

東京大学は今でも、他の大学が廃止した教養教育を残しています。自分とは何か、自分の生きてきた場所はどうなのか、見つけていく意味もあります。「ふるさと教育をしても学力につながらない」という考え方では、本当の意味での「学力」にならないでしょう。自分がどこから来た人間でどこに向かっていくのか、自分で語れる何かを持たないと、人生のどこかで必ず行き詰まります。福井の先生方ならご理解いただけるのではないでしょうか。

（平成２６年５月２１日　ご本人にインタビュー）

全教員向け

福井の子どもたちが自信と誇りを持って生きていくために

～ふるさと教育の本質と意義～

各市町においては、郷土に愛着をもつ子どもの育成を教育方針に掲げている場合が多く、各小中学校においても、ふるさとの自然、文化、歴史等に触れる機会を増やしながら、これらを受け継ぎ、発展させていく教育を推進しています。ただしこれらの根本にあるのは、言うまでもなく「人材育成」です。子どもたちが将来、力強く社会を生き抜くために大切なことは何なのか、ふるさと教育の本質に迫りながら考えていきます。

○福井に対する誇り

前出の玄田有史氏の希望学調査から、※個人として希望を持っていることが、地域への誇りの意識と密接にかかわっていることが明らかになっています。一見、それほど相関がないと思われるふるさとに対する意識が、実は「人生を力強く生き抜く礎になっている」ことが、データからも実証されています。また、出川昌人氏のインタビューにあるように、ふるさとに対して誇りを持ちふるさとを理解することは、異文化を理解するうえでの「ベンチマーク」であり、さらにふるさとを語れることが、異文化交流への自信にもつながります。

このように、「ふるさとに対する誇りと自信」が、将来の希望を持つことや、異文化への理解といった広い世界につながっていることを、私たちはあまり意識してこなかったのではないでしょうか。「ふるさと教育」を進める上で、教育する側がこのような意識を持つだけでも、大きな変化があるのではないでしょうか。

※希望学[３]希望をつなぐ 玄田有史・中村尚史[編] 2009 年初版 東京大学出版会

○子どものころの「原体験」

小学校では、偉人について知ったり、考え方を学んだりする機会があると思います。中でも、自

分の住む地域の先人について学んだり、地域での体験活動を行ったりする教育は、子どもたちの発達にどのような影響を与えるのでしょうか。

現実問題として、先人の業績や地域の文化に対する子どもたちの関心や理解は、そう高くないと思われます。ところが、子どものころの思い出は、強い意識としてではなく、不思議と心に残る「原体験」である場合が多いものです。笠松雅弘氏が述べていらっしゃるように、ゲーミフィケーションの要素を取り入れたり、体験型のものを多く取り入れたりという工夫により、印象的に子どもたちの心に刻まれていくものです。この「原体験」は漠然としたものかもしれませんが、子どもたちの成長過程の中で、少なからず影響を及ぼすことがあるのではないでしょうか。進路決定の際にしろ、大学で講義を受ける際にしろ、このような原体験をふと振り返る機会に恵まれることで、人生の大きな示唆を得ることがあるのです。

○自分の役割と居場所探し

ふるさと教育を推進する際に留意すべきこととして、子どもたちの主体性が挙げられます。講演を聞くだけとか、本から学ぶだけではなく、興味・関心を持ったことについて、自分の足・目・耳で調べる活動が大切になります。そしてその成果物として、プレゼンテーション資料、画像、映像などの発表資料を残すことも大きな意味を持ちます。

また、玄田氏のインタビューにあるように、功績を残した人について知ったり考え方を学んだりする場合に、功績を残した本人だけでなく、周囲で支えた人たちについて調べるのも貴重な経験になります。「想いを遂げる人」以外にも「想いつく人」や「想い込む人」の存在があります。「偉人」だけでは、「すごい人だ」という印象だけで終わってしまいますが、視野を広げていろいろな生き方を知ることによって、「自分にふさわしい役割」を見つけることができるのです。

そういった意味では、調べる対象は必ずしも「偉人」である必要はありません。身近な地域で、いろいろな体験をした人の話が聞ければ、親近感がわき、自分と同化しやすくなります。自分が存在感を持って輝ける場所はどこなのかという、「将来の自分の居場所探し」にもつながってきます。

○教える側が考えるべきこと

これまでふるさと教育の意義について考えてきましたが、子どもたちとかかわる上で、もう一つ大切なことがあります。それは今さら言うまでもありませんが、教員自身が、本当に福井の良さを理解するということです。

福井の先人のことや福井の歴史について伝えるためには、教員自身のより深い理解が必要です。自分の言葉で、自分で工夫した伝え方で、子どもたちに伝えることができれば、子どもたちの心にも響きますし、笠松氏がおっしゃるように、教員自身の自己研鑽にもつながります。

高校での進路指導も同様です。福井の企業や大学について伝えることができなければ、子どもたちの選択の幅は広がりません。「都会へ行くといろいろなものがあって楽しいし便利だよ」と都会の良さばかり伝えると、偏った指導になってしまいます。教員が福井の良さをしっかり伝えられることが、ふるさと教育の大きなポイントの一つなのです。

「ふるさと」の発想－地方の力を活かす
著 西川一誠　岩波新書

西川知事の著書です。お読みになった方も多いかと思います。東日本大震災以後、東京一極集中の日本社会に対する懸念もあり、地方の力の充実に注目が集まってきています。５年前に発刊されたものですが、地方の重要性や存在意義について提唱されたこの本を、今一度読み返してみるのもいいのではないでしょうか。「ふるさと」について、今一度考えてみてください。

○「福井で生まれ育ってよかった」

第１５号でも紹介しましたが、本年度から、高等学校において、「夢や希望を育て未来を築く教室」が始まりました。敦賀高校での第１回の様子を、次に紹介しています。各界の第一線で活躍されている本県ゆかりの企業経営者等に、「福井ふるさと教員」として、高等学校の教室で「授業（講演ではない)」をしていただくものです。「福井ふるさと教員」の方々から話をうかがうと、「自分を生み育ててくれたふるさとのために少しでも貢献したい」「福井の高校生が、立派に現代社会を生き抜くことができる大人に育ってほしい」という、ふるさと福井に対する熱い想いが伝わってきます。「福井ふるさと教員」のみなさんは、「福井」ではなく、「世界」や「日本」という舞台で活躍されています。しかし、このような「福井」に対する想いを常に持ち続けられ、ご多忙の中にもかかわらず、就任依頼もご快諾いただきました。将来活躍する舞台がどこであれ、「福井に生まれ育ってよかった」という気持ちを胸に、羽ばたいてくれる子どもたちの支援をしていけるかが、ふるさと教育の根本にあるのではないでしょうか。

高校教員向け報告

ＪＸホールディングス 内田幸雄副社長の授業

夢や希望を育て未来を築く教室「福井ふるさと教員」による授業がはじまりました

□日時：平成２６年５月３０日（金）１４：１０～１５：４０

□場所・クラス・人数　敦賀高校　２年６組　４１名

□テーマ「次世代エネルギーを考える」※３回シリーズの第１回

□授業内容

最初に内田氏から、「日本のエネルギー情勢について」という講話をしていただきました。このなかで内田氏は、安定供給、経済性、環境適合性の３つの「Ｅ」に、東日本大震災以降、安全性の「Ｓ」を加え、「３Ｅ＋Ｓ」がエネルギーの供給目標であることを紹介されました。そして、「この『３Ｅ＋Ｓ』を満たす解は簡単には見つからないが、解決に向けてチャレンジしてほしい」と生徒たちに呼びかけられていました。

このあと、生徒からの質問の時間が設定され、エネルギー問題だけではなく、内田氏のキャリアに関する質問もあり、内田氏から、さまざまなメッセージをいただきました。

最後に、第２回に向けての課題「日本における次世代エネルギーのあり方について具体的な方策を考えよ」の提示がありました。予定の時間を超えての活発な授業となりました。

＜内田幸雄氏＞

JXホールディングス(株)取締役副社長執行役員。
昭和26年1月20日坂井市生まれ。
中学校1，2年生の時は気比中学校に通う。
父親は国鉄職員で、敦賀駅長を務める。
昭和44年　高志高校卒業。
昭和48年　京都大学法学部卒業後、日本鉱業(株)入社。
昭和54年～56年には米国アトランタのジョージア工科大学へ海外留学。(株)日鉱共石企画本部参事、(株)ジャパンエナジー専務取締役などを経て、
平成24年6月JX日鉱日石エネルギー(株)取締役副社長執行役員。平成26年6月から現職。

連　載　「派遣教員インタビュー」③ ～佐賀県の先生～

平成２５年度に６名（４県）の先生が、人事交流で、他県から福井県に派遣されていました。佐賀県からの派遣の先生と、熊本県からの派遣の先生について、一挙、２回分を掲載いたします。

まず、佐賀県から坂井市立丸岡中学校に派遣されていた北原成之先生です。

○福井に赴任して感じたこと

北原成之先生

県の施策である市町教委への県指導主事の配置､福井大学教職大学院との連携、コア・ティーチャー養成事業や教育研究所のミドルステップアップ研修等は、県と市町教委、学校との距離間をなくし、教職員の研修意欲の向上にもつながっている素晴らしい取組みであると感じています。

赴任した丸岡中学校は、管理職を中心とした協働型組織で運営され、全職員で学校組織マネジメントを実践するためにＰＤＣＡサイクルを活用しており、教職員の校務分掌に対する意識が大変高いと感じます。また、他の先生方の授業を見学して思うのは、板書が丁寧で説明も細かく、前後の系統性を意識した授業をされる先生方が多いということです。その要因として、授業研究の充実と小中人事交流が関係しているのではないかと思っています。

協働で行う授業研究は、赴任校だけでなく福井の他の学校でも多く見られますが、佐賀県の学校の多くはどちらかというと現職研究に近いものが多く、教職員の差をなくす効果のある福井型の校内研修は大変参考になります。また、赴任校は各種テスト対策として、学級だけでなく学年と教科担当が連携して動いていますが、細かい学習計画表やプレテストによる補充指導、過去問題を用いての習熟等、教科内容だけでなく傾向と対策という勉強の仕方をしっかりと学ばせているところに興味があります。

子どもたちは大変素直に接してくれますが、佐賀の子どもたちと比べると、自分を出せない子が多いような気もします。しかし、雨でも当たり前のように自転車で登校し、勉強だけでなく部活動や掃除など最後まで粘り強く取り組む姿を見ると、高い学力は授業だけでなく、基本的な生活習慣や冬季の厳しい自然で生活している生活・家庭環境が関係しているような気がしています。

○佐賀県が今取り組んでいること

私は今回の福井県への派遣において、好成績の要因や家庭・地域との関係を分析し報告するという教育長ミッションを受けていますが、県は定期報告をもとにシステムの見直しや新しい取組みに着手し、教職員の意識改革を図ろうとしているところです。

さて、現在佐賀県は、時代に対応したＩＣＴ利活用教育先進県を目指し、公立学校等に全国初となるクラウドを用いたネットワークシステムを導入しました。校務支援による多忙化の解消はもちろん、福井型１８年教育のように校種間連携を円滑に進め、子どもの情報を高校までつなぐことが容易になります。また、学校のＩＷＢ普及率は実質１００％になり、平成２７年度には全教室に整備する予定です。指導する教職員は、昨年度全員がＩＣＴ利活用研修を終え、ＩＣＴを活用して指導できると答えた教員も９０％を超えてきました。来年度からは全県立高校１年生で学習者用端末を用いた授業も始まりますが、２年後にはいよいよ県立高校生全員に１人１台が実現する予定です。

※　この記事は、昨年度いただいた情報をもとに作成されています。

連　載　「派遣教員インタビュー」④ ～熊本県の先生～

次に、熊本県から派遣されているお二人の先生です。宮脇真一先生は越前市吉野小学校で、松永尚子先生は福井市進明中学校でお勤めでした。

○この１年で感じたこと

宮脇真一先生

松永尚子先生

福井県の学校に勤務して１年がたちました。「福井はどうですか」「熊本と何が違いますか」この１年間で何度となくこのことをたずねられ、その度に「細やかな指導」「当たり前の質が高いこと」と答えました。授業の準備、子どものノート指導、生徒指導…どれをとっても「率先垂範」を地でいく先生方の姿。第一印象であり１年たった今も変わらぬ印象です。

子どもたちもとても素直で真面目です。課題遂行意識が高く、宿題や約束事をきちんと守ろうと努力する姿をよく見ました。中にはやんちゃな子どももいますが、エネルギーを向ける方向性をしっかりともたせると、どんどん力を発揮します。

そんな生真面目な子どもたちであるが故に、物足りなさを感じることもありました。小学校算数の授業で、問題の文面や場面が変わると、解決する「過程」ではなく「結果」を知りたがります。年度当初「算数の学習で楽しいと感じることはどんなこと？」という問いに対し,「計算」「簡単な問題が解けること」と答えた子どもは全体の８割以上でした。授業中「この問題が解けることが大事なのではなく、この問題を解くためにいろいろと試したことが次の場面で生かされることが大事」ということを繰り返し話し、「使える知識や技能を育てること」「実際にやってみること」に取り組みました。１２月末に再度行ったアンケートでは「難しい問題に挑戦すること」「友達と学びあうこと」と答える子どもが７割を超えました。コア・ティーチャー養成事業でのテーマが「活用力」であることからも、今の福井の子どもたちに必要な力だと思います。

○熊本県の教育

熊本県では「教育と、教育に密接に関係する子育て、スポーツ、文化等の振興に関する事項」を盛り込んだ「くまもと『夢への架け橋』教育プラン」のもと、「未来を拓く『くまもとの人』づくり」に取り組んでいます。学校教育では「徹底指導と能動型学習のメリハリをつけた熊本型授業」を推進しています。未知の状況に遭遇しても、状況を正確に把握し自分がもっている知識や技能を活用して対処できる力の育成を目指しています。また「熊本の心」という道徳の副読本を作成し、心の教育にも力を注いでいます。

福井を離れる今、これまで熊本で取り組んできたことや、この１年間福井の先生方とともに仕事をさせていただいたことから、他者に学ぶ姿勢の大切さを改めて感じています。子どもたちは有能です。一から十まですべてを教え込むのではなく、子どもたちが「考える」「他者とかかわり合う」「試してみる」「実感する」、こんな環境をいかに私たち教師がデザインするかということを、子どもに学びながら作っていこうと思います。使い古された言葉ですが、「子どものできることを奪わない。教師がすべきことを怠らない。」このことを実感した１年間でした。

公開授業 報　告

中高の接続に焦点を当てた授業で

中高授業改善交流会（社会）が行われました

Ｈ２６．２．２６　於：越前市立武生第一中学校

□公開授業

・授業者 坂下博行教諭　・授業クラス １年８組　・授業内容「アフリカ州」　・参観者 合計３２名

中高の接続に留意して **社会科におけるジグソー法によるグループ学習** の授業を公開していただきました

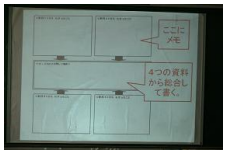
まず、教師による一斉指導の形式で前時までの学習を振り返りました。そして、本時の学習課題「ガーナの人々はなぜ貧しいのだろう」について考えていくことを確認しました。

次に、学習班を８つ編成し、４種類の資料「カカオ豆価格の推移（資料１）」、「ガーナの輸出品目の割合（資料２）」、「金（ゴールド）価格の推移（資料３）」、「コーヒー１杯の価格の内訳（資料４）」のうちいずれか一つを各班に配付します。最初は各自で「資料からわかったこと」を読み取り、次に学習班の中で互いの意見を共有し、そして最後に、「一言で言えば…」を書き出しにして、班員それぞれが自分の考えをまとめていきました。

そして教員の指示により７つのジグソー班（４つの異なった資料を読み取った４（５）人の班員で構成）に編成し直して、それぞれの班員が自分の読み取った情報を他の班員に伝えました。その後４つの資料からわかったことを関連づけて、自分の意見をまとめていきました。（右下の写真参照）／ 時間の関係で数人になってしまいましたが、最後に生徒の意見発表が行われ、教員がまとめをして授業を終えました。生徒一人ひとりが主体的に、資料の読み取り、説明、まとめという活動に取り組めた授業であったと思います。

本時の課題を確認

ジグソー法による
グループ学習



ＩＣＴを利用して
まとめ方を説明

□研究協議会

・参加者　合計２７名

＜授業者のコメント＞ 資料提示の方法などにもう少し工夫の余地があり、生徒に多少の混乱があったと思う。資料を読み取る力は大切であるが、読み取った上で自分の考えをまとめる力や、それを人に伝える力となるとなかなか身につかない。指導要領の改訂後、進度に余裕がなくなり、調べ学習などに充てる時間が減ってきた。そういった意味で、前述した力を効率的につけられるジグソー法を、ここ数年は多く用いるようになった。また「アフリカ」をテーマにした「ウェビングマップ」を学習過程の中で随時書かせている。生徒の考えていることが「見える化」できて、さらに生徒自身が自分の伸びを実感できるという点でよい方法だと感じている。

ーグループで実施した研究協議での話題をピックアップー

＜ジグソー法について＞ジグソー学習の特徴は、グループで共有した情報を、責任をもって他の班に伝えることである。これにより、自分の考えを整理して話す場面が必ず出てくる。／ジクソー法をどこで取り入れるかは工夫の余地がある。グラフの読み取りは一斉授業で行い、話し合いを深める方法もある。

＜本時の授業について＞生徒が主体となる活動がメインで、とてもよかった。／生徒たちが意欲的に取り組んでいたのが印象的だった。前時に動画を見せて子どもに興味を持たせたことも、本時の活動につながっていると思う。／言語活動が活発に行われていて、すべての生徒が発言していたので感心した。高校では学校によっても差があり、発言する生徒としない生徒の差が大きい。／生徒は４枚の資料を短時間で効果的に活用していた。これまでの学習の成果が表れている。言語活動の充実という面では、他の意見をそのまま聞いているだけでなく、反対したり賛成したりする場面があってもよいと感じた。

＜中高の連続性について＞今まで、小学校や高校の授業に足を運んだことがなく、教科書を見たこともなかった。小学校でどんなことを学んできたか知らないまま、中学校ではリセットして教えていたが、小学校や高校でどのようなことを教えているのかを知らなければならないと思った。／高校の内容を教えながら中学校の内容に立ち戻ることもある。中学校の学習を土台にして、高校の授業を積み上げられるとよいと思う。／高校では生徒たちの意欲に差がある。話し合いに参加できる生徒とできない生徒がいる。中学校では、内容のレベルは問わず、とにかく話し合いに積極的に参加する生徒を育ててほしい。／中学校では、いろいろなことに対して「なぜ？」と素朴な疑問を持ち続け、それを率直に発言できる生徒を育ててほしい。学ぶ意欲につながり、言語活動を活発にしていくのではないか。

＜その他＞ウェビングマップについては、生徒の学びの履歴がわかり、子どもたちの達成感にもつながる。小中高すべての校種で取り入れられると思う。／高校の進学校では、いかにテストでよい点数を取らせるかが目的となりがちである。しかし、入試に小論文や面接を課す大学もあり、自分の考えをまとめることや自分の考えを表現することは重要視されている。

※この授業の様子は、教育情報フォーラムでも公開中です。

＜教育研究所濵田敏功主任の助言＞

- 中学校教員と高校教員が互いに授業を見る機会が大切である。グループ協議でも活発に意見交換が行われたが、お互いの取組みや考えがわかったことは中高連携の大きな一歩である。
- 現在、日本においてグローバル人材は３５０万人必要とされているが、４０万人もいないと言われている。職種も非定型双方向的でクリエイティブなものが増えていくと予想されている。この状況下の学校教育では、教員と生徒、あるいは生徒同士の双方向でのやり取りが必要となり、言語活動が重要になってくる。言語活動は、小中高を通した系統的な視点が必要である。
- 社会の授業を小中高通して見ると、発達段階に応じて考えが広がり深まっていく。中学校では主体的に学ぶ姿勢を身につけ、「何を(What)」「いつ(When)」「どこで(Where)」「誰が(Who)」の視点を中心に学習させ、精神的に発達する高校段階では「どれを判断して選ぶのか(Which)」を考えさせることが大切になってくる。

※助言者の所属は昨年度のものです。

参考図書

■阿川佐和子「聞く力」　文春新書（採用内定者研修図書）

頑固オヤジから普通の小学生まで、つい本音を語ってしまうのはなぜか。インタビューが苦手だったアガワが、1000 人近い出会い、30 回以上のお見合いで掴んだコミュニケーション術を初めて披露する。だれでもできるアガワ流対話術として、「２秒の間を大事にする」「先入観にとらわれない」「面白そうに聞く」「知ったかぶりをしない」「素朴な質問を大切に」「質問の柱は３本に」などの一心をひらく３５のヒントーを紹介している。（本の帯より）

■チャールズ・ダーウィン「種の起源」上・下　光文社古典新訳文庫（採用内定者研修図書）

『種の起源』は専門家向けの学術書ではなく、一般読者向けに発表された本である。名のみ知られるばかりで、その内容については多くを語られることのなかったこの歴史的な書を、画期的に分かりやすい新訳で贈る。進化学はすべての生物学の根幹をなしている。そしてそのすべてのルーツは『種の起源』初版にあるのだ。端緒を開いたダーウィンの偉業、それは進化の研究を科学にしたことと、進化が起こるメカニズムとして自然淘汰説を提唱したことにある。(訳者／Amazon ウェブサイトより)－写真は上巻

■関根郁夫「少なくとも三兎を追えー私の県立浦和高校物語」さきたま出版会

三兎とは勉強・部活動・学校行事である。教諭として６年、校長として４年浦和高校で過ごした著者が若い魂とともに全国の学校へエールを送る。（本の帯より）／＜著者紹介＞1954 年 3 月埼玉県生まれ。1978 年北海道大学理学部卒業。同年、埼玉県立春日部東高校教諭。以来、県立浦和高校、県教育局、市立川口高校などを経て、県立志木高校長、県教育局高校教育指導課長を歴任。2009 年、県立浦和高校の第 28 代校長、2013 年 3 月同校退職。4 月から県教育委員。2013 年 7 月埼玉県教育委員会第 18 代教育長。

芦泉荘からのお知らせ

休憩利用補助券（1,000円）が売店で使用できるようになりました！

※ただし、売店でご使用になる場合はご宿泊された方が対象となります。

【平日価格 1泊2食付 お1人様】

青葉	8,300円
杣山	10,100円
ヘルシー美食	10,300円
文殊	11,900円
足羽	14,900円

☆温泉はいつでもご入浴いただけます
☆ご夕食はお部屋でゆっくり

詳しいお問い合わせは
芦泉荘(0776－77－3200)まで
HP www4.ocn.ne.jp~rosenso/

☆☆ 宿泊利用補助券使用時のポイント ☆☆

① 杣山プラン以上でご利用の方は「芦泉荘宿泊利用補助券」2,500円が2枚同時に使用できます！

② 教職員互助会発行「契約施設・旅行者取扱宿泊利用補助券」2,000円を併用するとさらにお安くご利用いただけます！

（例）　杣山プランをご利用の場合
芦泉荘宿泊利用補助券2,500円×2枚＋契約施設・旅行者取扱宿泊利用補助券2,000円
お1人様7,000円の割引を受けることができます！
つまり・・・1泊2食付杣山プラン(10,100円)が 1泊2食付3,100円となります！

バックナンバーをホームページに掲載しています。

福井県のウェブサイト「学習・教育」のページに教育情報誌「明日への学び」のバックナンバーを掲載しています。（http://www.pref.fukui.lg.jp/doc/gakukyousei/asuhenomanabi.html）

明日への学び　で検索してください。

ご意見をお寄せください。

住所　：福井市大手 3-17-1

連絡先：福井県教育庁学校教育政策課

TEL　：0776-20-0295
FAX　：0776-20-0668
Mail：gakukyousei@pref.fukui.lg.jp